

特集

「自然観」「生命観」を問われる 農事業のとりくみ

月刊『協同の発見』誌の特集から、この5年ほどの農的な事業を拾うと、「農山村・中山間地域の再生と協同労働の可能性」(2009.8月号)、「食と農と環境を結んだ仕事おこし推進事業調査」(2011.9月号)、「農村と都市を結ぶ地域づくり」(2013.12月号)、「地域自給圏構想いまここに共にいきる」(2015.3月号)など2年に1度くらいは編まれている。とはいえ、その内容の多くは農業理論の枠組みか、他団体による先進事例などの紹介であって、先駆的農事業という形で頁が割かれているのは、「半農半ワーカーズ」を提唱した「ワーカーズコープ山口」など数例しか散見できない。この間に取り組まれていたFEC自給圏構想の中でも、食や再生可能エネルギーのBDF、間伐材に取り組む林業などと対比すれば、農事業の始動は難産だったことは否めない。(もっとも座談会に登場する古村専務の話によれば、農に対するワーカーズの取り組み意識は早くからあったようだ)

ところが、この一年ほどの間に農的事业への挑戦は急展開している。今年に限ってもわかる。「よい仕事集会」(2月27日)には、自然農法、無農薬農法の立役者で、ワーカーズコープの農業経営にも大きな影響を与えている「パーソナルアシスタント青空」の佐伯康人さんが記念講演者として登場している。このときの講演タイトルは、「命あふれる『自然栽培』」だった。佐伯さん自身は脳性まひの3つ子を授かったこともあって、本格的に障がい者と向き合うようになったという。そして「奇跡のりんご」の木村秋則さんと出会い、慧眼した佐伯さんは、農業法人、株式会社、NPO法人を立ち上げていく。放課後児童デイサービス事業等においては、無農薬、無肥料の農業をつうじて障がい者雇用の実現へと邁進し、農福連携による障がい者の自立支援事業を手掛けていった。

農薬や肥料、除草剤を一切使わない佐伯さんの野菜づくり米づくりは、従来の農法より手間を要するが、微生物の力を借りて田畑の土を「森の土のように」することから、傾聴していた参加者に衝撃を与えた。野菜自身の力を引き出す佐伯さんの自然栽培方法は、「自然が私に力を与えてくれている」という言葉に象徴されよう。(本誌5月号に掲載)

講演後には佐伯さんたちの試みる愛媛県松山のファームへ、全国に散らばるワーカーズコープの組合員たちは見学実習に訪れている。さらに豊田市で開催された第一回「自然栽培フォーラム」(5月20日)には、全国から自然栽培に取り組む若き百姓仲間たちが賛同参集していたが、そこにはワーカーズコープの組合員たちも少なからず参加した。

今年、創立25周年記念を迎える協同総合研究所においては、協同組合の源流と原点を訪ね

る一環として、二宮尊徳と大原幽学の研究会を開催した。すでに小田原で開催されていた「報徳ワーカーズ」発会式(3月26日)には、二宮尊徳に造詣の深い池上惇の記念講演があった。労協新聞にその全容が掲載されている。「世界史の転換における尊徳思想の創造的な発展を」という見出し記事とともに、「ワーカーズコープは今、あらゆる仕事おこしをしている。しかも福祉と農業を結合した形の仕事おこしを目指している。これは現代における生命と生活の再生活動に他ならない」と載っている。疎外された現代の労働環境下において、「本来の健康と生きがいを取り戻そうする際に、農業を一つの手がかりにするのは、理にかなっている。農業は自然との付き合いが必ずあるからだし、自然から学び研究しつつ、人から学び、人と協力しなければできない仕事であるからだ」と。(労協新聞1088号)

二宮尊徳の考えにも共鳴してもらえるワーカーズコープにこそ、報徳農場の経営を継承してもらいたいと決意した田嶋亨会長は、地元神奈川新聞の連載記事「わが人生」において、報徳思想の教えを田嶋家は先祖代々から伝えられてきたと報じている。秋田県にある「わらび座」も二宮尊徳を来年上演するという。「現代座」では、江戸中期新田開発に取り組んだ川崎平右衛門ら農民たちの、協同労働の原点(「武蔵野の歌が聞こえる」)を上演してきた。

ワーカーズコープの現場は、対人的な福祉・教育の施設管理事業とともに、食農、森林、循環エネルギーといった、いわゆる「第一次産業」へ果敢に挑戦する傾向がこのところ顕著となっている。この斬新な動向は、現代社会の闇を覆っている心身の病に露払いせんと、颯爽と登場しているように見えなくもない。FEC事業は新たな経営業態というより、先ずはヒューマンな生き方を農と農業から捉えなおそうとしているのではないのだろうか。従来から取り組まれてきた障がい者、子ども、若者、高齢者といった人々を直接対象とする指定管理者制度等の対人事業のなかにおいてさえも、田園回帰するような自然派の指向を加味した農的事業の取り組みも展開されている。それは地域、市民と「共にある」、「地域の人たちが共に暮らせる」まちづくりをめざす機運と一体となっている。

5月には労協連編『協同労働の挑戦』(萌文社刊)が出版された。本篇には、九州沖縄で開催された一昨年の協同集会上に登壇された農民作家の山下惣一、宇根豊、永戸祐三(労協連理事長)が、本書編纂のために再登場しており鼎談として掲載されている。そこには農と農業の自然観と生命観の本質を突いた「皆農」「小農」「ダーチャ」といったキーワードをめぐる議論が展開されている。

6月11日の協同総合研究所の総会日にお招きした蔦屋栄一講演は、近年の自給・皆農への潮流をにらみながら、「農的社会到来はなぜ必然的なのか」その底流にある生命原理も含意した問題意識に根ざしている。蔦谷は『農的社会をひらく』(創森社刊)において、もはや農による「生命原理の復興」は、「自給・自立、協同・共生を土台」として必至の流れであると述べている。近年の都市農業の潮流もまた、その例外ではないと語った。

6月16日に小田原で開催されたワーカーズコープの総会・総代会の基調において、「全て

の生命の尊厳と循環を基盤にした 相互扶助の社会づくりを使命とする 協同労働運動の船出 一分断・排除と破壊に満ちた、この社会を終わらせる—」という表題が飾られ、専務の報告があった。「新しい社会」「本物の地域・コミュニティ」を編み出す機運の高まりという項目の中に以下のような一節が記されている。

.....

日本社会がその根源に「相互扶助」の思想と経済を編み出した歴史と伝統は、「相利共生」の文化である。その実践は「地域にこそ存在する。直接の手応えや共感が人を動かし、心を動かし、社会を動かす。上からの変化を待つのではなく、自らの中から変化を呼び起こし、その連帯が地域をつくる。こうした地域が無数に創造されるとき、改めて人間は社会と共に生き、社会の中でこそ生きられることに、希望と確信を持つだろう。今その実践が多くの地域で生まれ始めていることに希望を託し、希望をかけて、地域づくりから新しい社会を展望する。そのカギを握るのは、先人たちがその昔、困難を越えようとする中で、人間の有り様を考える基盤として持っていた、揺るぎなき「自然観」の再構築であろう。震災や原発が示した教訓は、人間が忘れかけていた「自然の中の人間」という普遍性への謙虚さである。私たちの FEC自給から地域循環型産業の創造をめざす取り組み、そして協同労働そのものも、こうした「自然観」を基盤とすると、大きな普遍的価値を生み、その共感・共有の中で地域化し、社会化していくだろう。

.....

こうした文言は、組合員の日々の実践と運動の到達線上に「協同労働の協同組合」たる所以を示唆する、思想的哲学的な深淵を提起したといえるのではないか。

「自然観」なるものは、「外なる自然」と「内なる自然」とに分裂させず、「物心一如」に見なくてはならないのではないか。しかも山・川・草・木のみならず、社会も人間すらもが自然の一部であって、存在するものすべては自然の内にある。自然が傷つき元の形を留めないならば、社会もヒトである人間の心身すらも、消耗しては歪み傷つく。その逆の場合もまた真なりで、自然と人間の因果は連続・連鎖しており「万物同根」ということか。

かつての日本人は、西欧近代主義的な自然観をもち合わせていなかった。縄文の時代から考察すれば、人間の(幸せの)ために自然があるのだとしたら、それは山川草木といった具体事象に恵まれるアニミズムの神々であって、それらを総称する自然(しぜん)という語彙も認識もなかったのではないか。

密教(自然智)、日蓮(自然法爾)らにおいて、「自然」は「じねん」と呼称されていたが、明治以降に発声する「しぜん」とは全く意味内容の異なるものだ。「じねん」なるものは、「自ず(から)と然(さ・そう)する」といった意味である。

当時の使われ方は、「おのずから」に重心があって、「自(おのずか)ら然(しか)り」のように「自然とそうなる」の意であった。ところが江戸中期の安藤昌益(自然真営道)の場合には、自然

を「自(ひと)り然(す)ル」と読ませる。昌益にとっての自然とは、自己もまた自然界に包摂され、終わることのない自然と一体化した永遠の自己運動状態を含意しており、「みずから」(自発主体的に)と、「おのずから」(自然に)の両義性が分立対峙しないばかりか、内と外なる自然運動と実践は統一されている。今日の「皆農」にも通じる昌益の「直耕」などは、その典型といえよう。

幕末のころオランダから輸入された「nature」は、自然(しぜん)と翻訳されたが、後の更なる近代的な欧化政策によって、日本人は人間による自然の支配を可能とする西欧近代主義の線上にあった「ネイチャー」なる自然観を獲得してしまった。

経済成長のためと称され、便利で豊かな社会発展実現の対象物へと躍り出た自然(しぜん)は、乱開発加工され環境改造されてしまい、元の自然風景は一変した。近代以前仕様の自然神も「じねん」(自然)も消えて、「自然に」とか「自然な」と言った副詞や形容詞の語意使用は少なくなってしまう。

「自然観」は、あらゆる生きものの「いのちと身体の尊厳」の根幹にあるから、「生命観」とは一對一体であった。だから何故に、他の生命体より人類の方が優位に存続しているのかという哲学的命題を問われる。人間の「生きる糧だから」といった、単純で傲慢な理由を越えなくては、まだ地球の破壊行為はつづくだろう。それは食する人たちすべてに問われ、土を耕している農事業者の「自然観」「生命観」だけに迫られているのではない。自然と人間との間に介在直結している「労働観」と「国家観」をも問われるに違いない。

本特集では92歳と84歳なる、ご高齢者の論稿を頂戴した。齢に絶句したわけではない。その論稿があまりに凜として、役行者(えんのぎょうじゃ)のように鍛え抜かれ、精彩を放っているからだ。お二人の玉稿は、自然観を探るに困難なベルサイユ宮殿の人工的な庭園ではなく、自然の素材を存分に生かした枯山水の孤高の石組みを連想させてくれる。ともに25年ほど前の「仕事の発見」「協同の発見」当初から、いやもっともっと以前の戦時中から書きつけてきた御人である。

それに比べると座談会は、農家の納屋で最近生まれたばかりの初々しい元気な赤子の泣き声だったかもしれない。それを補完してくれるのが佐々木論文である。農事業とり組みの経緯と個別事例について網羅しており、立体化させている。ぜひセットでお読みいただきたい。

ワーカーズコープは、子どもたちに向けられたシュタイナーの自然農と芸術教育の域にはまだ入らずも、哲学者ネスの実践と運動重視の「ディープエコロジー」思想には迫りつつあるかもしれない。その行方を元気な「長老」に見届けてほしいと思った。

(上平泰博)